

# スピーチロック廃止への取り組み

## 続報と今後の課題

大崎町 介護老人保健施設サンセリテのがた

発表者：竹之内りほ(介護福祉士)

共同演者 春別府稔仁(医師) 加治掘みさを(介護福祉士) 堤口京子(看護師) 安田典子(准看護師)  
富重亜希子(介護支援専門員) 梶ヶ山加代子(介護支援専門員) 池田トモ子(社会福祉士)  
北野なつみ(介護福祉士) 田中樹(介護福祉士) 鈴井かおり(介護員) 福岡藤雄(介護員)

### 【はじめに】

現在当施設での拘束者は入所者 100 名中ミトン着用 1 名・両手を縛る 1 名の計 2 名である。前回のアンケート調査の結果より行ったスピーチロックの検討結果から、施設内において、就労経験年数の異なる職員間でスピーチロックの認識や対応方法が異なっていること、スピーチロックを認識していても改善の手だて(対処方法)が確立していないことなどが判明した。そこで当施設では、スピーチロックの発見・指摘と対応に関する客観的指導を行う「スピーチロック-ジャッジマン(以下ジャッジマン)」を配置することとした。腕章を装着したジャッジマンの配置を開始して、施設内のスピーチロックに関する状況に変化が認められ、また新たな問題点も見えてきたため、アンケート結果と若干の文献的考察を加えて報告する。

### 【対象と方法】

対象者はサンセリテのがた全職員で、H25.9.20～H25.10.1 を回答期間とした。スピーチロックに重点を置いた設問と、比較対象のため前回のアンケートから引用した設問を選択回答式、記述式にて実施した。対象職員を経験年数 3 年未満、3～5 年、5～10 年、10 年以上に区分し回答内容の割合を比較した。記述式については内容の多い順に整理した。

対象職員全 84 名全員から回答を得た。

### 【結果】

1. 言葉による行動抑制の経験ありが前回 80%だったが、今回は 60%と減少傾向ではあるものの、約半数は使用しており、「動かないで」「立たないで」「待って」等の内容が多かった。
2. ジャッジマンを経験し、気持ちの上で変化が生じたかとの問いには、約 80%の職員が変化ありと回答している。また、約 60%の職員がジャッジマンを目にするだけでも、自身の言動を意識するようになったと回答している。
3. 腕章をつけていることで、不適切な言動を耳にした時注意しやすくなったかの問いには 70%が特に変化なしと回答しているが、実際注意できたかの問いには、65%が注意できると回答しており、特に経験年数 10 年以上の職員が 84%と高い割合であった。
4. ジャッジマンを配置した事で施設の雰囲気や利用者に対しての言葉使いや言動に変化が生じたかとの問いに、約 75%が変化ありと回答し、少なからずジャッジマンの効果はあると思われる。小数意見として、「会話や言葉かけが減少した。」との意見が聞かれた。

### 【考察】

施設内に腕章を装着したジャッジマンを毎日配置したことで、施設の雰囲気や職員の言葉使い等に変化が認められた。また、利用者からも、「表情や態度が優しくなった。言葉使いが良くなった。」との感想が寄せられた。ジャッジマンとして他職員に客観的な指導を行うには、自身がスピーチロックについて理解すべきという気持ちが働き、意識の向上につながったものと思われた。また、ジャッジマンを目にする事で、自身の態度や言動を見直す機会にもなっている。結果、ジャッジマンを担当した職員が毎日入力しているチェック表には、「スピーチロックを耳にして注意した」とのコメントは書きこまれなくなっており、一定の効果があつたと評価している。

新たな問題点として、ジャッジマンの存在やスピーチロックを意識するあまり、利用者との会話や言葉かけが減少したのではとの意見が聞かれた。このことはコミュニケーション不足を引き起こす可能性を有し、早急に対処する必要がある。「どのような声かけをしていいのかわかる時がある」との意見や「適切な言葉かけを具体的に示してほしい」などの要望があったことから、実際にいくつかの事例を提示し「待って」「動かないで」等の言葉に変わる表現を参加者みんなで考える勉強会を行った。また、コミュニケーション不足解消の助けになるよう身体拘束廃止委員会が考える適切な言葉かけの事例集を作成し目につく所に掲示した。

今後も、縛る、ミトン使用などの身体に対する物理的な拘束廃止の検討に加え、言葉による拘束についても、定期的な状況調査や勉強会の開催、ジャッジマン配置の継続など積極的に取り組んでいきたい。

〈参考文献〉 身体拘束ゼロへの手引き 厚生労働省「身体拘束ゼロ作戦推進会議」

インターネットより 「スピーチロックの廃止に向けて」 介護老人保健施設「いつきの里」 原 克行